

中古天台における黒谷戒家の思想

—特に信心受戒について—

秋田 晃 瑞

日本の鎌倉時代には、僧風の墮落を正す為に、各地で戒律復興運動が起こった。比叡山においても、そうした主張を持つ一派が現れ、彼らは西塔黒谷を拠点としていたので「黒谷戒家」（以下戒家）と呼ばれた。

当時の比叡山の思想の中心は、「天台本覚思想」と呼ばれるもので、凡夫を全く肯定することにより、凡夫は凡夫のままに既に仏果を得ているといった、即身成仏論を展開し、その極端にあつては修行無用論、戒律無用論にまで展開することとなる。

そうした中、それに異を唱え、凡夫の肯定による独自の即身成仏論を展開しながらも、戒律護持を訴えたのが戒家であり、その中心思想を「受戒成仏」と呼ぶ。また、この受戒成仏の思想は単なる事相の結果ではなく、受戒に信心の不可欠性を強調することで、信心受戒という思想が形成される。本発表はこれら黒谷戒家の思想を考察しながら、戒家における信心の意味を明らかにするのが目的である。

一、戒家における円戒復興の動機

初めに、戒家がどのような理由で比叡山において円戒の復興を為したのか、その動機を考察した。

戒家の思想は、「恵心流」と対比させて考察されることがある^①。恵心流というのは、平安時代末あたりに成立したとされる、恵心僧都源信の思想を汲む流派である。恵心流は、当時叡山の思想の中心であったと言われており、その思想は仏教教理内に収まることなく、日本文化に大きな影響を与えた、所謂「天台本覚思想」であった。恵心流の戒学は理戒を主張していて、それが結果的に僧風の墮落につながり、戒家はそのような思想に対して事戒を主張し、戒律復興を志したというのが一般的な捉え方である。

恵心流は、妙法を持つことは法界に安住することであり、その境地は一心三觀や一念三千といった、観心によって体得されるものであることを特に主張し、その境地を

体得していれば自ずと戒が具足されるとした。つまり具体的な持戒を論じない、理論としてのみの戒（理戒）が、当時の叡山の主流であり、遂には妙法を伝授することの他に、戒の伝授は無いという主張にまで発展する。

対して戒家は、戒の伝授こそが妙法を持つ姿であり、従来の如く、自発的に戒を持つていこうとする姿（事戒）を強調したのである。

このように、対立視して考察される戒家と恵心流であるが、実は両流の思想傾向には類似した点が多くみられるのである。例えば恵心流は積極的な持戒は説かないが、戒が必要無いとは論じていない。一心三觀を行ずることで、戒が持たれるのである。また戒家においても、観心が根本的に不必要だとはしていない。受戒・持戒の一刹那に観心が具足されるので、強ちに用いないというまでである。

このような思想の類似性は、両流の思想の根底が共に「天台本覚思想」にあるからであり、対立した概念を持つてはいるものの、戒家と恵心流はこの本覚思想という大きな思想の中で、それぞれに発展した流派であることを明かにした。

二、受戒成仏について

戒家は受戒によって仏果を具足することから、「受戒成仏」という思想を展開させる。この受戒成仏の思想が、どのような構造であるのかを考察した。

まず戒家における成仏とは、真言密教でいう「三密加持」による成仏ではなく、天台学の「六即」を用いた成仏であることを明かにした。六即というのは、凡夫位である理即から究竟円満の位である究竟即到に至るまで、仏の平等性が一貫して説かれていることを明かす思想である。つまり、仏も凡夫も諸法実相ということにおいては、不二平等であるので、我々凡夫は悉く仏の当体であるといえる。これによって理即仏という表現がなされ、理即であつても仏果が具足されているとされる。

戒家においてもこの教理を論拠としており、理即の身であつても、受戒をすることによって究竟の仏と同じ功德を具足するとしている。ただしそれは、受戒の中で伝授される戒体を發得することが条件とされる。即ちこの戒体とは、仏の覚りそのものを指し、受戒によってこの覚り（戒体）を納得するので、仏果具足とされ、受戒成仏と表現されるのである。

また戒家において、戒体は真如として扱われる。この真如は全ての存在に不変的に内在している（不変真如）ことと、その真如が様々な縁に随って顕される（随縁真如）

という二つの真如があるとされる。所謂る、未受戒の者は真如が内在してはいるものの、それを覚知していない凡夫であり、受戒の縁によってその真如を覚知し、仏果具足に至るのである。

この真如は、先の仏の覺りと同一視され、真如（戒体・仏の覺り）を得ることで、現身に成仏することから、戒家の受戒成仏の思想は、戒体の發得が成仏に至る最も重要な点であり、しかも必ず受戒を決起としなければならぬという構造を明かにした。

三、信心受戒について

戒家の思想は先のように、受戒成仏に極まるのであるが、その受戒に信心の必要性を強調することで、信心受戒ともいえる主張をしている。この戒家のいう信心が、受戒においてどのような役割をなすのかを考察した。

仏教において、信心が必要不可欠なものであることは、多くの経典に明かされることであり、天台宗が所依としている『梵網經』にも、成仏に対する信心が、仏果具足をもたらす旨趣を説いている²⁾。

戒家はこの信心を、「疑いの無い心」として定義している。例えば、天台学における空・仮・中の一心三觀において、空・仮の二辺に執着することは疑いの心（疑心）であり、その疑心を越えた即空即仮即中の境地を、疑心無き信心、即ち中道であるとする。つまり、真理に対する疑いの無い心を信心であるとし、真理を覚えることは智慧であることから、信心は智慧として表現されるのである。これは、受戒における戒体發得によって、成仏することに疑いを持つ者は、道理に暗い無明の凡夫であり、その疑心が無くなれば（信心が起れば）、中道実相の妙理（戒体）を覚るので、無明を破す智慧が信心であると考えられるのである。従って、戒家における信心の役割は、戒体を發得するため、言わば真理を理解するための智慧であるということを明かにした。

小結

これらの考察によって、戒家という流派の解明に、新たな思想を読み取ることができた。それは、戒家は恵心流の觀心主義に対して、觀心を用いない、受戒による仏果具足を目指したのであるが、実は戒家にとって觀心は、受戒という儀式を通して、受戒者の行為に包括されて説かれていたのである。即ち、戒家のいう即身成仏の根幹となる受戒・戒体・信心と、觀心との関係を明らかにすれば、中道実相の円融の理（戒体・

真如）を覚るのは、三惑（疑心）を破す三智（信心）であり、この三智（信心）は一心三觀（受戒）によって得られるのである。

以上、天台教学やその実践である止觀（觀心）は、受戒によって説明・納得されるものであるとするのが、戒家の思想であったということ論証した。

註

- (1) 福田堯穎『天台学概論』六六四―六六五頁。
- (2) 「大衆心諦信、汝是當成仏、我是已成仏。常作如是信、戒品已具足。」「大正藏」二四、一〇〇四上

（大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻）